

1 年生 「何のやさい・くだもの？」

1. 授業の実践記録

(1) 英語を用いて主体的にコミュニケーション活動に取り組むための工夫（仮説 1）

【学ぶ楽しさを味わうための工夫】

児童が日常で触れることが多い身近な野菜や果物を取り上げた。担任と A L T によるデモンストレーションでやり取りを示し、ジェスチャーやイラストを用いて話をしたり、様々な野菜や果物を取り上げて繰り返し伝えたりして、1 年生でも英語での話の大体が分かるよう工夫した。担任や A L T の話を聞くことで「自分の好きな果物も伝えたい！」「友達の苦手な野菜や好きな野菜をもっと知りたい！」と児童が感じられるような働きかけを行った。

また、好みの野菜や果物を使ったフルーツバスケットを取り入れ、遊びを通して積極的に英語でのやり取りができる活動を設定した。「相手の好みのものを聞き取ろう」「自分の好みを正確に伝えよう」という意欲を自然に引き出すことを目指した。野菜や果物は、児童が自分の好きなものを自分でイラストに描き、それをゲームに用いることで、一人一人がより主体的に活動に取り組むことを目指した。



(3) 英語に慣れ親しみ、伝え合う楽しさを実感するための工夫（仮説 3）

【インプットの工夫】

児童が英語に慣れ親しみ、伝え合う喜びを実感できるよう、繰り返し英語の音声に触れる機会を意図的に設けた。A L T が積極的に児童に話しかけ、英語の発音に触れる回数を増やし、児童自身も発音する場を設け、安心して楽しく活動できるようにした。また、各授業の冒頭には歌の活動を取り入れ、単調な反復練習にならないよう歌のスピードに変化をつけたり、早口言葉のようにゲーム性をもたせたりする工夫を行った。これにより、児童は同じ歌でも新鮮な気持ちで活動に取り組むことができ、英語を「楽しむもの」として積極的に受け入れる様子が見られた。



2. 指導の結果と考察 ○成果 ●課題

(1) 英語を用いて主体的にコミュニケーション活動に取り組むための工夫（仮説 1）

- 野菜と果物という身近な題材であったため、意欲的に活動に取り組むことができた。
- フルーツバスケットは遊びの要素が強いため、正しく発音することよりも、コミュニケーションに集中できたことで、英語を用いて主体的に取り組む姿が見られた。
- 取り上げられた野菜や果物の数に限りがあったため、児童の好みに合わせて幅広く提示できれば、さらに児童の語彙が広がったと思われる。

(3) 英語に慣れ親しみ、伝え合う楽しさを実感するための工夫（仮説3）

○ゲームや歌を通して、楽しく活動したことは、英語への抵抗感を減らす上で効果的であった。

●月に一度の英語の授業では、英語に触れられる機会が不足しているため、日常的に触れる機会があればさらによい。今後は朝のイングリッシュタイムを通して、英語に慣れ親しむ回数を増やしていく。